

特集 さまざまな課題に対応するために

妥当性を意識した
テスト作りにおける留意点

佐藤 臨太郎 (奈良教育大学)



佐藤くんと先生の会話

中学2年生の佐藤くんと英語の先生の会話です。
佐藤くん「先生、いつも点数の一番悪い英語の定期テスト、今回は、英文をしっかりと暗記して読も覚えて、いい点数をとれたと思います。」
先生「そうか、それはよかった。採点が楽しみ！これからも頑張ろうね。」

佐藤くん「はい、なんだか英語が少し好きになれそうな気がします。頑張ります！」

英語の苦手な生徒が頑張っている点数を取ってくれるのはうれしいことです。教師冥利に尽きますね。ですが、ちょっと待った、です。はたして今回の佐藤くんの受けた定期考査はちゃんと英語の力を測定しているのでしょうか。

妥当性と信頼性

妥当性 (validity) とは、作成したテスト問題が測ろうとする技能・能力を評価するのに妥当であるかどうかということです。例えば、受験者の発音能力を測定するのに、written test で、「最も強く発音される部分はどこか」や、「下線部の発音が同じ単語はどれか」などと尋ねても、それは実際に発音できる能力ではなく、語彙の発音に関する知識を問うことになるので、発音能力測定には妥当性が極めて低いといえます。佐藤くんの例では、ただ英文・日本語訳を暗記しただけで高得点が取れるのであれば、暗記力のテストとしては妥当性が高くて、英文読解力に関しては妥当性が低いということになります。

信頼性 (reliability) とはそのテスト問題が、常に信頼できる一貫性の測定力を持っているかどうかということです。つまり、ある種のテストを何度受け

ても結果が大きく変わらないで安定しているのなら信頼性が高いといえます。佐藤くんの場合だと完全に暗記できているのなら、何度受けても高得点が取れるので、信頼性が高いといえることになります。しかしながら、ここで問題なのは、いくら信頼性が高くても妥当性が低ければテストとしては失格であるということです。持久力を測るのに、100m 走を何度測定しても意味がないのと同じことです。テスト作成においては、まず第一に、測ろうとする技能・能力をしっかりと測れる妥当性の高い問題を作成すべきということになります。

ではどのように？

定期考査で生徒の読解力を測るのであれば、初見の英文を問題文として出題することが有効です。しかしながら、定期考査は生徒の能力がどれくらいあるか測る実力テストなどの「熟達度テスト」とは違い、テストの範囲についてどの程度理解しているかを調べる「到達度テスト」であるので、授業で扱った内容が反映されるものでなければいけません。では、28NC Book 2 Lesson 6 My Dream の USE Read を例に、具体例を提示してみます。

提案1 テキストタイプを教科書に合わせる：ここでは、職場体験プログラム後の健のスピーチが題材になっているので、問題文も他の誰かのスピーチの形式にし、情報の一部に変更を加える。

提案2 スピーチをパラフレイズした英文にする：健のスピーチの内容を第3者が述べているかたちで、基本的に重要な情報はそのままパラフレイズする。

提案3 テキストタイプをダイアログにする：スピーチを聞いた友人2人が、その内容について

会話している英文を提示する。

提案1～3では、扱う文法項目であるto不定詞の副詞用法、形容詞用法を含む英文、新出単語を含む英文を必ず入れるようにする。

提案4 健のスピーチを精巧化する：スピーチに追加の情報や詳しい説明を加えた英文を提示する。

提案5 問題の選択肢を初見の英文にする：健のスピーチと、穴埋めにした要約を提示し、同じ意味になる表現を選択肢から選ぶ問題にする。

初見の英文を作成する際、「内容」、「形式(文法事項、表現、語彙)」の共通性に留意することが必要です。共通性が高ければ高いほど、難易度が低い(生徒には答えやすい)ということになります。

以下は提案1の例です(下線部は変更箇所)。

Hello, everyone. What do you want to be in the future? I want to be a veterinarian, or an animal doctor. I have two main reasons.

First, I like animals, especially dogs, very much. They are cute. When I was a child, I liked to play with a puppy at my grandmother's home. I used to play with my cousin's very big dog in Hokkaido too. Now I have a big dog, Taro. We take a walk every morning.

Second, dogs can do many things. There are dogs to rescue people and dogs to play with people. Now dogs care for people too. When I was in a nursing home, I saw a woman in poor health. She held a puppy. She was smiling and talking to it. She looked very happy because she had a wonderful friend.

In conclusion, dogs are not only cute but also useful. In the future, dogs will play a bigger part in our lives. I want to cure injured dogs and dogs in poor health. I have many things to learn. I will study hard to be a veterinarian. Thank you for listening.

出題問題としては、本文から情報をそのまま見つける“Right there”型(例: What does he want to be in the future?), 内容を読み取り、答えを出す“Think and search”型(例: What is the main point of the speech? [選択肢から選ばせ

る]), さらにプロダクティブな質問として生徒自身に考えさせる“In your head”型(例: What do you want to be in the future? And why?)等が考えられます。最後の質問は読解力を測るのではなく、生徒のライティング能力測定を意図した問いになります。

佐藤くんはどうなるの？

初見の英文を提示したり、教科書の英文を変更することにより、機械的な丸暗記では対応できない妥当性の高い問題を作成することができます。このような考査を実施することにより、英文を理解しないで暗記しても高得点はとれないと生徒に理解させ、日頃から理解して覚えていくという学習姿勢を促すことになります。このテストが学習に与える影響のことを「波及効果」といい、今回の提案においても、長期的にみて生徒に良い波及効果を与えることができると考えられます。

それでは、最初に出てきた佐藤くんはどうなってしまうのでしょうか。私は個人的には定期考査においては、生徒の頑張りを評価してあげる余地があるべきだと考えます。事前に出題する問題の形式、内容の一部(場合によっては問題そのもの)を知らせ、生徒に「勉強すると必ず点数が取れる」と気づかせることで動機づけを高めたり、本文の英文をそのまま使い、授業で扱った問題も考査に入れることにより、生徒の授業への取り組みを高めることができます。英語が苦手な佐藤くんでも勉強すれば必ず点数が取れるという問題を考査に入れることも不可欠であるといえないでしょうか。

まとめ

定期考査では、英語力そのものを測るという妥当性の高い問題と、その意味では妥当性は低い英語の苦手な生徒にも易しい問題を併用していくことが必要であると考えます。それぞれのタイプの問題の難易度と、両者の割合については、担当の先生が、生徒のレベルや動機づけ、日頃の授業内容、授業での活動から判断し、決定していくとよいでしょう。ちなみに、佐藤くんはその後、英語が好きになっていき、今、英語教師として頑張っているそうです。